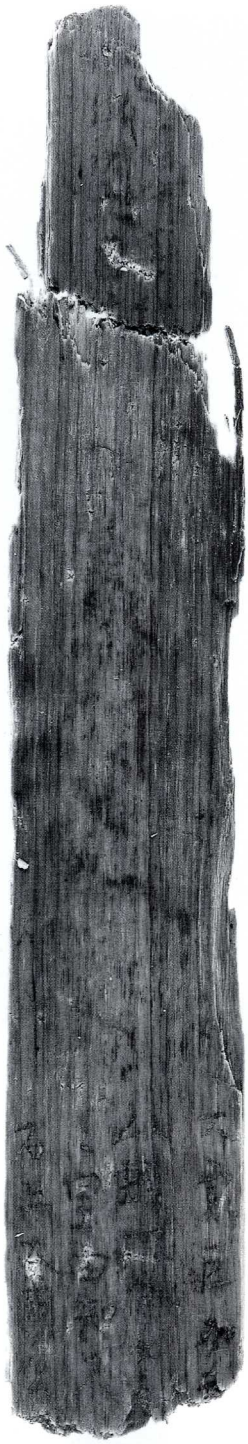
二〇〇八年一一月

飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報（三）

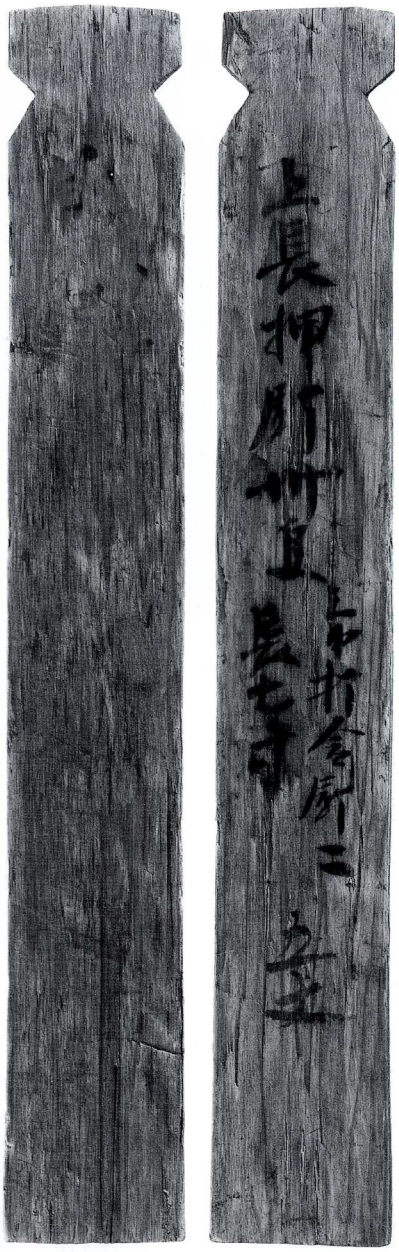
奈良文化財研究所

図版一

1



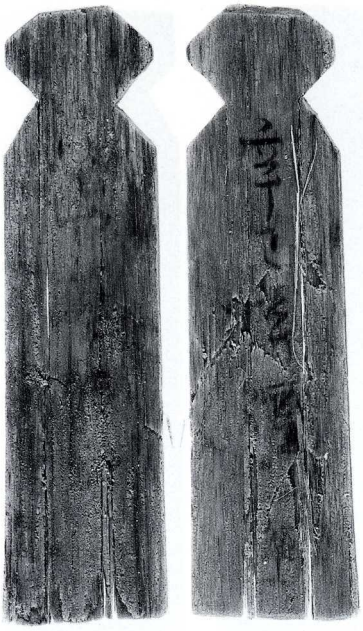
8



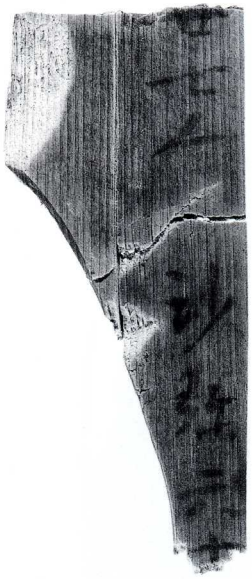
18

（2：3）

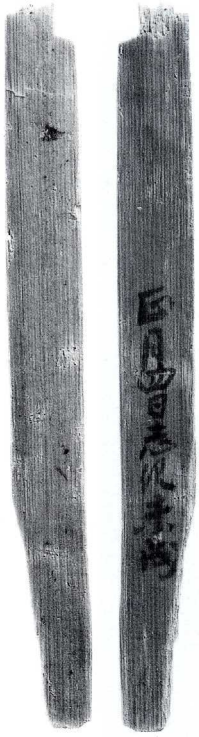
図版二



14

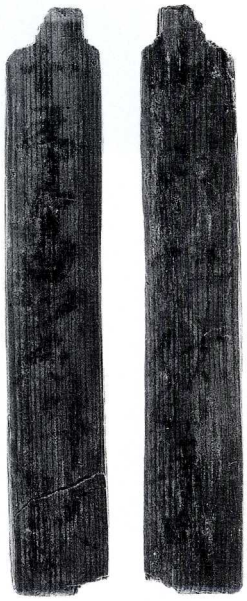


10



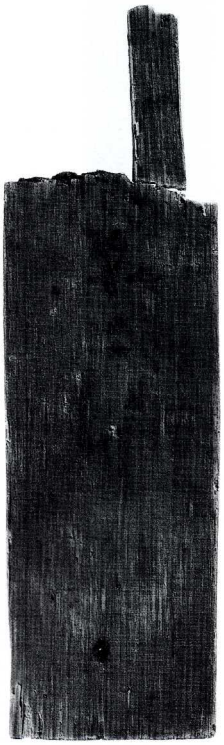
20

7



13

19



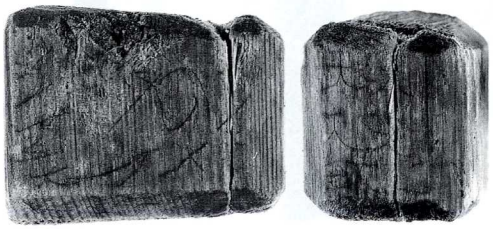
16

（2：3）

図版三

6

21



4

2

17

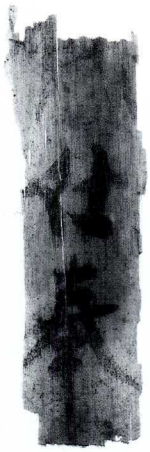
（2：3）

図版四

64

109

85


62

96

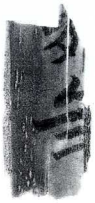
35

37

36

52

101


95

107

58

54

66

25

（4：5）

この概報には、さきに刊行した『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報（二十一）』（二〇〇七年。以下『木簡概報二十一』と略す）以後、二〇〇六度に都城発掘調査部〔飛鳥・藤原地区〕の行なった発掘調査で出土した木簡のうち、主要なものを収録する。木簡が出土したのは、飛鳥藤原第一四五次調査（石神遺跡第一九次調査）である。これは『奈良文化財研究所紀要二〇〇八』（二〇〇八年。以下『紀要二〇〇八』と略す）で出土木簡の一部を報告している。

また、二〇〇五年度以前に実施した調査のうち、②飛鳥藤原第一二二次調査（石神遺跡第一五次調査、二〇〇二年度）で多数の削屑木簡が出土したが、その整理作業が一段落したので、それらについても報告する。また、③小山廃寺跡東南部の調査（一九八七年度）に関しても、これまで未報告であったので、あわせて報告したい。

この他、折りに触れて実施してきた木簡の再調査を通じて、釈文に一部訂正する箇所が生じているので、こちらで把握しているものを列挙する。ただし、藤原京木簡に関しては、本年度に木簡図録『飛鳥藤原京木簡二―藤原京木簡一―』（奈良文化財研究所史料第八十二冊、二〇〇九年三月刊行予定）で釈読可能な木簡はすべて取り上げるので、ここでは省略する。また、既刊の『木簡概報』で釈文訂正したものも省略する。木簡の再調査は今後も継続する予定であり、機会をみて報告していきたい。

一、木簡の出土地点と状況

第一四五次調査（石神遺跡第一九次調査）

５ＡＭＤ区　二〇〇六年一〇月～二〇〇七年五月

一九八一年度より実施している石神遺跡の継続調査の一九回目。調査地は石神遺跡の中心をなす建物群の北外側にあたる。第一五次調査以来、中心建物群北側の土地利用と近隣に想定される阿倍山田道の確認を主眼に調査を進めており、その過程で七世紀後半頃の木簡が多数出土している。今回の調査区は、第一八次調査区のすぐ北側で、発掘面積は八七〇㎡（図１）。検出した主な遺構は、阿倍山田道、溝、沼沢地、堰状施設、杭列、礫集中である。これらは大きく五時期に分かれる。ここではⅠ～Ⅴ期に分けて記述する。

〔Ⅰ期〕七世紀中葉以前

調査区に谷が入り、西側には沼沢地ＳＸ四〇五〇が広がる。沼沢地の内部には堰状施設ＳＸ四二六二が設置されている。東側の微高地には、北に向かって西に振る斜行溝ＳＤ四二六〇が掘削される。幅二・一～二・五ｍ、深さ〇・五ｍで、断面は逆台形を呈する。

〔Ⅱ期〕七世紀中葉～七世紀後半

沼沢地ＳＸ四〇五〇と斜行溝ＳＤ四二六〇を埋め、阿倍山田道ＳＦ二六〇七をつくる。ＳＸ四〇五〇の堆積土内には杭列ＳＸ四二六三～四二六五が打ち込まれ、北で西に振る南北二二ｍ、東西二〇ｍ

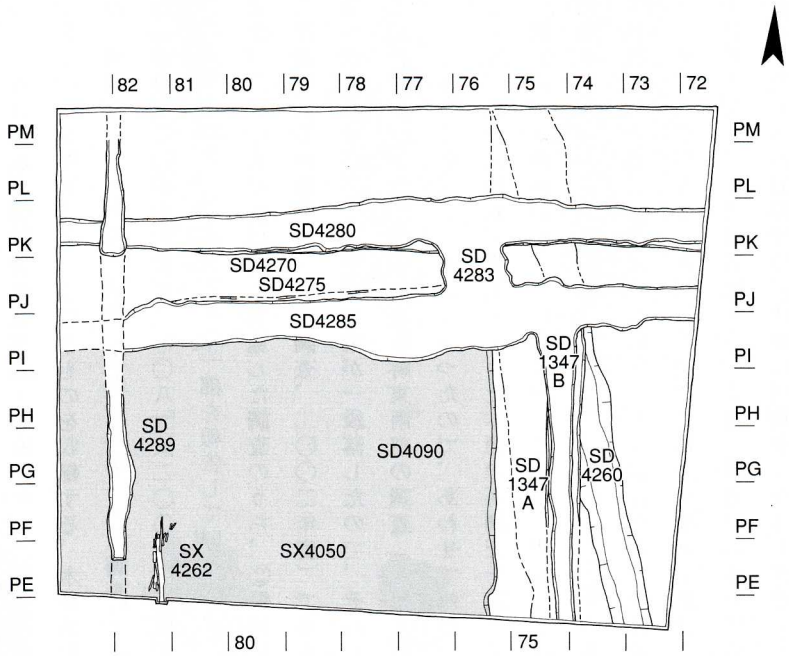


図１ 第145次調査遺構図　1：300

以上の方形区画が設けられている。杭列を境にＳＸ四〇五〇の埋立土の状況が異なることから、杭列は埋立時の土留めの役割があったと考えられる。ＳＤ四二六〇からは七世紀中葉の飛鳥Ⅰ新段階の土器が多数出土しており、阿倍山田道の建設はこの頃と判断できる。道は盛土工法で構築され、基礎部分には敷葉工法が用いられていた。

こうして阿倍山田道の路面を盛土した後、その南側溝ＳＤ四二七〇が掘削される。ＳＤ四二七〇は側面と底で石の抜けた痕跡が認められ、石組溝であったと推定できる。幅一・三～一・八ｍ、深さ〇・二～〇・四ｍである。またＳＤ四二七〇の南側には、第一五次調査区から続く南北大溝ＳＤ四〇九〇が屈曲して西に流れた。これまでＳＤ四〇九〇の掘削時期は七世紀後半としてきたが、阿倍山田道の盛土がＳＤ四〇九〇北岸となる堤の役割を果たしているので、両者は一体的に整備したと判断できる。すなわち、ＳＤ四〇九〇の掘削は七世紀中葉にまで遡る可能性が新たにでてきた。ＳＤ四〇九〇は幅二二ｍ以上、深さ〇・五ｍで、東岸は直線状をなす。なお、阿倍山田道とＳＤ四〇九〇との間を遮蔽する施設は確認していない。

この他、北で西に振る斜行溝ＳＤ四二七一が存在する。沼沢地ＳＸ四〇五〇を埋めた土を掘り込み、阿倍山田道の盛土によって覆われた溝で、Ⅱ期造成に関わる一時期な排水溝と考えられる。

〔Ⅲ期〕七世紀後半

阿倍山田道南側溝ＳＤ四二七〇と南北大溝ＳＤ四〇九〇を埋め、

東西溝ＳＤ四二七五、南北溝ＳＤ一三四七Ａを設けてＴ字状に接続させる。ＳＤ四二七五は阿倍山田道南側溝で、ＳＤ四二七〇を南に三～三・五ｍ移動させたものである。幅一・五～二・二ｍ、深さ〇・三ｍである。一方、ＳＤ一三四七Ａは石神遺跡全体を南北に貫く基幹排水路で、幅一・八～二ｍ、深さ〇・二ｍ。第一六・一八次調査では、ＳＤ一三四七Ａの下層で南北溝ＳＤ四一二七を検出しているが、本調査区ではその存在を確認できなかった。

〔Ⅳ期〕七世紀末

阿倍山田道南側溝ＳＤ四二七五と南北溝ＳＤ一三四七Ａを埋めた後、東西溝ＳＤ四二八〇・四二八五、南北溝ＳＤ一三四七Ｂを掘って〒状に接続させる。

ＳＤ四二八〇・四二八五は阿倍山田道南側溝である。ＳＤ四二八五はＳＤ四二七五をやや南にずらしたもので、ＳＤ一三四七Ｂとの合流点以東では幅一・三～一・七ｍ、深さ〇・一～〇・二ｍ、合流部以西では幅二・三～三・三ｍ、深さ〇・二ｍである。ＳＤ四二八〇はＳＤ四二八五の北約四・六ｍに位置し、幅一・三～二・五ｍ、深さ〇・二ｍ。ＳＤ四二八〇とＳＤ四二八五の掘削の前後関係は不明であるが、同じ灰色粗砂で埋まっていること、両溝をつなぐＳＤ四二八三の存在からみて、少なくとも最終段階では併存していた。北側の山田道第二・三次調査では、この時期の阿倍山田道北側溝とみられる東西溝ＳＤ二五四〇を検出しており、ＳＤ四二八〇を南側溝とすると、路面幅約一八ｍ、溝心々間距離で二一～二二ｍとなる。

一方、ＳＤ一三四七Ｂは ＳＤ一三四七Ａを埋めた後、ほぼ同じ位置に掘り直した溝である。幅一・二ｍ前後、深さ〇・二ｍ。

〔Ⅴ期〕奈良時代～

南北溝ＳＤ四二八九、礫敷ＳＸ四二五五・四二五九などがある。ＳＤ四二八九は調査区西側に位置し、幅〇・五～一・三ｍ、深さ〇・二～〇・四ｍである。阿倍山田道を横断しており、道路が機能低下していたことを推測させる。ＳＸ四二五五は第一五次調査区から続く礫敷で、径五㎝前後の小礫が中心である。礫敷ＳＸ四二五九は第一八次調査区から続く礫敷で、逆Ｌ字状に東に折れる。人頭大の大礫が集中し、ＳＸ四二五五の上を覆う。礫に接して瓦器が出土していることから、平安時代以降の遺構と考えられる。

〔木簡〕木簡は、①沼沢地ＳＸ四〇五〇埋立土から一点、②斜行溝ＳＤ四二六〇から五点、③阿倍山田道ＳＦ二六〇七造成土から二点、④南北大溝ＳＤ四〇九〇から一三点（うち削屑四点）、⑤阿倍山田道南側溝ＳＤ四二七五から一点、⑥ＳＤ四二七五埋め立てに伴う周辺整地土である暗灰褐色粘質土から一点、⑦阿倍山田道南側溝ＳＤ四二八〇から三点、⑧阿倍山田道南側溝ＳＤ四二八五と南北溝ＳＤ一三四七Ｂの合流地点から一点、⑨Ⅴ期以前の茶灰色土から一点、⑩南北溝ＳＤ四二八九から四点、⑪現代暗渠から一点、計三三点（うち削屑四点）が出土した。

◎石神遺跡北方域の遺構変遷について

石神遺跡第一五～一九次調査を通じて、石神遺跡の北限施設から阿倍山田道にいたる南北一〇〇ｍほどの空間を発掘したことになる。これまで各調査ごとに遺構の変遷過程について報告したが、調査を繰り返す過程で、一部所見が変更された部分もある。ここに改めて整理を行なってみたい。ただし石神遺跡の発掘調査は今後も継続するため、今回の整理はあくまでも現時点における所見として理解されたい。なお、石神遺跡第一五～一八次調査では、石神遺跡中心部の調査所見にもとづくＡ～Ｃ期という時期区分を用いて遺構変遷をたどってきたが、第一九次調査ではＩ～Ｖ期という新たな区分を用いており、それに従って叙述する（図２、表１）。

〔Ｉ期〕七世紀中葉以前

第一五～一九次調査区内はもともと谷が入った起伏のある地形で、北西方向に向かう流路が調査区の大部分を覆い、沼沢地ＳＸ四〇五〇が形成されていた。沼沢地の堆積は古墳時代中・後期にかけて進行しており、堰状施設も形成されていた。第一八・一九次調査区の東側には微高地が形成されており、方位が振れる斜行溝ＳＤ四二六〇や石組列ＳＸ四二三五が設けられており、東方には何らかの施設が存在したとみられる。山田道第二次調査などでは、七世紀代の方位が振れる掘立柱建物や溝を多数検出しており、この時期の遺構となる可能性が高い。

〔Ⅱ期〕七世紀中葉～後半

Ｉ期の沼沢地ＳＸ四〇五〇および斜行溝ＳＤ四二六〇は埋め立てられ、周辺一帯の整地がなされた後、阿倍山田道が構築される。その時期については、斜行溝ＳＤ四二六〇の埋立土から飛鳥Ｉ新段階の土器がまとまって出土したことから、七世紀中頃と推定できる。沼沢地埋め立ての際には、杭列で方形区画をつくり、土留めを行なっている。山田道第二・三次調査では石組暗渠を検出しているが、この一連の整地に伴う可能性が高く、雷丘東方の広範囲にわたる造成であったとみられる。整地後、敷葉工法を用いた盛土工法によって阿倍山田道の構築がなされ、南側溝として東西溝ＳＤ四二七〇が掘削される。

阿倍山田道の南方では、逆Ｌ字の大溝ＳＤ四〇八九・四〇九〇が掘削された。東西溝ＳＤ四〇八九として東流した後、南北溝ＳＤ四〇九〇となって約九〇ｍ北流し、再度向きを変えて西流した大溝である。ＳＤ四〇九〇の東岸は直線的であるが、西岸は北に向かって徐々に広がり、北岸付近では幅二二ｍ以上も存在する。ＳＤ四〇九〇の両岸には土手状の施設を設け、水流を制御していた。第一六次調査区では、ＳＤ四〇九〇の西隣に円形土坑ＳＫ四一一三が存在しており、ＳＤ四〇九〇の西岸と一体化していた時期もある。

ところで、大溝ＳＤ四〇八九・四〇九〇の掘削時期については、第一五次調査において、天武七年（六七八）の木簡が出土した土坑

ＳＫ四〇六四とＳＤ四〇八九が重複し、ＳＤ四〇八九の方が新しいことから、七世紀後半と判断してきた。ところが、第一九次調査において、ＳＤ四〇九〇が阿倍山田道の造成と一連の作業で掘削されたという所見を得た結果、ＳＤ四〇八九に関しても七世紀中葉に掘削された可能性が高まってきた。この二つの調査所見は矛盾するが、土坑ＳＫ四〇六四との重複関係は、ＳＤ四〇八九が掘り直されたことによると考えれば、この問題は解決できる。第一五次調査ではＳＤ四〇八九・四〇九〇に先立つ整地土を上下二層にわたって確認しており、上層整地土に伴う土坑としてＳＫ四〇六四の他に、ＳＫ四〇六〇・四〇六五・四〇六六・四〇六九も検出している。もしＳＤ四〇八九・四〇九〇の掘り直しが認められるとすれば、これらの上層整地土と土坑群は、改修に関わるものと解釈することが可能となる。ただし大溝出土の紀年銘木簡をみると、天智四年（六六五）の年紀をもつ木簡が一点含まれているものの、他は天武七年（六七八）～持統六年（六九二）に分布することから、掘削が本当に七世紀中葉に遡るのか、慎重に判断を下す必要がある。

一方、大溝の西側には、小規模な二組の逆Ｌ字溝（ＳＤ四〇六八・四〇七三、ＳＤ四〇六七・四一一五）が設けられており、その西方に展開する施設を囲繞していた可能性がある。逆に東側の微高地においても、第一七次調査区で南北掘立塀ＳＡ四一六〇を検出しており、東方に施設群が存在していたことを予測させる。

〔Ⅲ期〕七世紀後半

逆Ｌ字の大溝ＳＤ四〇八九・四〇九〇などは埋め立てられ、整地もなされる。阿倍山田道の南側溝はＳＤ四二七〇からＳＤ四二七五に造り替えられ、道幅は広げられたと推定できる。大溝の埋め立てに際しては、一時的な南北排水路ＳＤ四一二一や、廃棄土坑ＳＫ四〇九六・四〇九七・四一二二などが設けられている。ＳＤ四一二一は木屑を多く含む溝で、その周辺にも木屑層が広範に広がる。

この時期、石神遺跡中心施設群から続く南北基幹排水路ＳＤ一三四七Ａが掘削され、阿倍山田道の南側溝ＳＤ四二七五に注ぎ込んだ。ＳＤ一三四七Ａはすぐ東側のＳＤ一四七六とセットになって南北道路の両側溝を形成するとみていたが、第一七次調査ではＳＤ一四七六は確認できず、南北道路の存在については再検討の余地が生じている。ただし両側溝こそ伴わないものの、石神遺跡を通って飛鳥寺西北隅にいたる通路の役割を果たしていた可能性は残る。

また、第一五次調査区では、掘立柱建物ＳＢ四〇七〇、石組井戸ＳＥ四〇八〇、石敷ＳＸ四〇八一が併存しており、調査区の西側に施設が展開していたことを示している。第一六次調査区にも、ＳＤ一三四七Ａの西側に石敷ＳＸ四一二四が存在し、これらと一連の可能性がある。

さて、南北基幹排水路ＳＤ一三四七Ａからは、天武四年（六七五）、同七～十年、朱鳥元年（六八六）の紀年銘木簡が出土してい

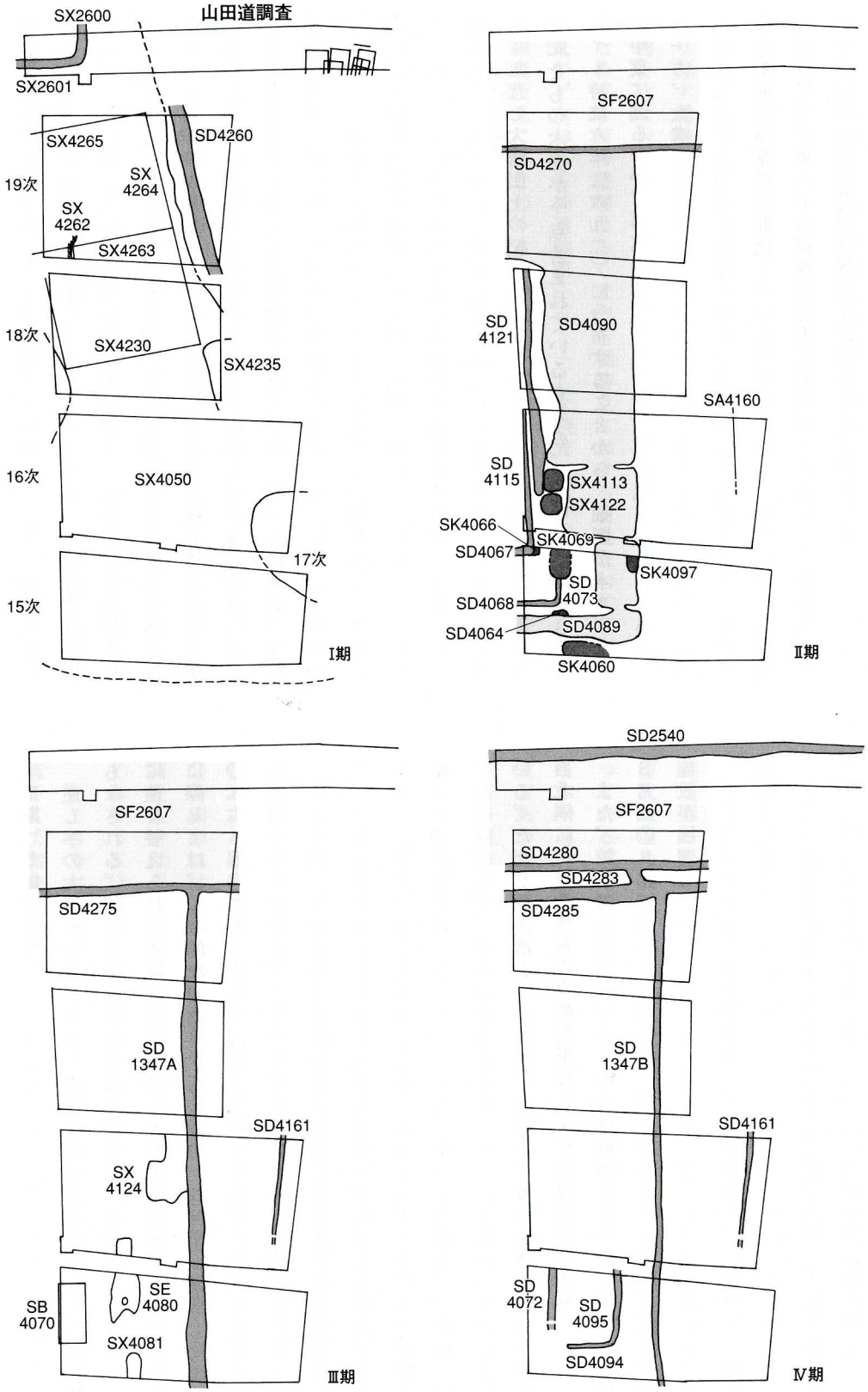


図2 石神遺跡北方域の遺構変遷図

表1　石神木簡の出土遺構と年代観

時期	木簡出土遺構	紀年銘木簡	五十戸	里	次数	木簡	削屑	計	木簡出典
Ⅰ期→Ⅱ期移行期	SX4050				19次	1	0	1	
	SD4260					5	0	5	㉒1～4
	SF2607造成土					1	0	1	㉒5、6
Ⅱ　期	Ⅱ期上層整地土				15次	6	0	6	⑰1～5
	SK4060		1			12	15	27	⑰6～9
	SK4064	天武7年（678）	1			14	108	122	⑰10～12、㉒23・24
	SK4066					19	203	222	⑰13～15、㉒25～31
	SK4069		2			26	471	497	⑰16～31、㉒32～57
	SD4089	天智4年（665）、天武7年(678)	9			114	579	693	⑰32～69、106～111、㉒58～87
	SD4090	天武13年(684)	3	3		63	144	207	⑰70～89、112～116、㉒88～94
		持統2年(688)、持統6年(692)3点	5	5	16次	63	48	111	⑱76～83、87～111
		天武8年(679)、持統4年(690)	1		18次	37	1	38	㉑1～22
					19次	9	4	13	㉒7～11
	SX4113		1		16次	9	5	14	⑱84～86
Ⅱ期→Ⅲ期移行期	SK4096	天武14年(685)、持統4年(690)	2	2	15次	18	8	26	⑰90～100
	SK4097	天武12年(683)				19	208	227	⑰101～105、㉒95～106
	SD4121	天武8年(679)	2		16次	72	313	385	⑱112～136
					18次	7	0	7	㉑23～25
	木屑層	天武8年(679)	2		16次	40	75	115	⑱137～150
	SX4122	天武11年(682)	3	1		19	32	51	⑱151～159
	Ⅲ期造成整地土			1	15次	4	1	5	⑰117
		朱鳥元年(686)	3	1	16次	17	0	17	⑱160～168
Ⅲ　期	SD1347A	天武10年(681)2点	11	1	15次	63	259	322	⑰118～142、144・145、㉒107～119
		天武4年(675)、天武7年(678)、天武9年(680)	4		16次	50	30	80	⑱169～190
		天武8年(679)、朱鳥元年(686)	3		18次	26	32	58	㉑26～41
	SD4275				19次	1	0	1	㉒12
	暗灰褐色粘質土		1			1	0	1	㉒13
	SE4080				15次	0	11	11	
	SB4070					0	2	2	
Ⅳ　期	SD1347B		1		15次	2	19	21	⑰143
					18次	4	0	4	㉑42
					19次	0	0	0	
	SD1347BとSD4285合流点					1	0	1	㉒17
	SD4280	天武10年(681)	1			3	0	3	㉒14～16
	SD4094				15次	2	0	2	
	SD4095	*持統3年(689)				5	0	5	⑰152～154
	SD4072			1		9	2	11	⑰146～151
	茶灰色土				19次	1	0	1	
Ⅴ期、その他	SD4289				19次	4	0	4	
	SD4126				16次	2	0	2	
	SK4063		1		15次	1	1	2	⑰155
	SD4071					1	0	1	⑰156
	SK4061					1	0	1	
	遺物包含層		2			9	1	10	⑰157～162
				1	16次	7	0	7	⑱191～193
					18次	2	0	2	㉑43、44
	現代暗渠				19次	1	0	1	
	第15次調査区埋戻土				17次	1	0	1	⑲1
	第16次調査区埋戻土					2	0	2	
	遺構不明				15次	0	2	2	
					18次	1	0	1	
合計			59	16		775	2574	3349	

【備考】1)木簡出典欄の○数字は『飛鳥・藤原宮跡発掘調査出土木簡概報』の号数を示す。
2)紀年銘木簡は干支を元号および西暦に置き換えて示した。SD4095の*は内容からの判断による。

【内訳】15次調査:2422点（うち削屑2034点）、16次調査:782点（うち削屑503点）、17次調査:3点
18次調査:110点（うち削屑33点）、19次調査：32点（うち削屑4点）。

る。サト表記についても、天武朝以前に一般的な「五十戸」表記のものが大半を占め、持統朝以後に一般化する「里」表記のものは一点にとどまる。Ⅱ期の大溝ＳＤ四〇八九・四〇九〇出土の木簡と比べて、むしろＳＤ一三四七Ａの方が若干古くなっている。ＳＤ四〇八九・四〇九〇→ＳＤ一三四七Ａという順序で溝が掘削されたことはほぼ間違いないが、木簡の年代に微妙な差異が生じている理由についてはさらに検討を要する。

〔Ⅳ期〕七世紀末

阿倍山田道南側溝ＳＤ四二七五はＳＤ四二八〇・四二八五に造り替えられ、南北基幹排水路もＳＤ一三四七Ｂに改修される。ＳＤ四二八〇とＳＤ四二八五の掘削の前後関係は不明であるが、最終的には併存していた。ＳＤ一三四七Ｂに伴う遺構として、石敷ＳＸ四〇九八を検出しているが、概して遺構は希薄である。ただし、Ⅲ期とした掘立柱建物ＳＢ四〇七〇、石組井戸ＳＥ四〇八〇、石敷ＳＸ四〇八一・四一二四がⅣ期の遺構となる可能性も残る。

この他、第一五次調査区の逆Ｌ字の大溝と重複する位置には、小規模な浅い溝ＳＤ四〇九四・四〇九五が流れるが、軟弱な低位部に自然に形成された溝、もしくは一時的な排水溝である。また第一五次調査区の西側には、掘立柱建物ＳＢ四〇七〇より新しい南北溝ＳＤ四〇七二が存在しており、この時期に属す可能性がある。

〔Ⅴ期〕奈良時代～

阿倍山田道南側溝ＳＤ四二八〇・四二八五、南北基幹排水路ＳＤ一三四七Ｂが灰色粗砂によって自然埋没した後、阿倍山田道を横断する南北溝ＳＤ四二八九が掘削され、阿倍山田道は機能低下する。当該期にはＳＤ一三四七Ｂを覆う石敷ＳＸ四二五五はあるが、建物などの遺構は希薄である。また、この石敷よりも上層では、素掘小溝や礫集中部を検出するにとどまり、基本的に農地化されたことを示す。第一六次調査では、水田耕作時の排水用の暗渠と推定される東西溝ＳＤ四一二六を検出している。

〔石神遺跡中心施設群との対応関係〕

以上、石神遺跡北方域における時期変遷を整理した。これまで石神遺跡中心施設群では、Ａ期（七世紀前半～中葉）、Ｂ期（七世紀後半）、Ｃ期（藤原宮期）という時期区分を採用してきた。上記Ⅰ～Ⅴ期との対応関係をみておきたい。

中心施設群と北方域で一連の遺構として存在するのが、南北基幹排水路ＳＤ一三四七Ａ・Ｂである。この溝は中心施設群ではＣ期に属すので、北方域のⅢ・Ⅳ期をそれにあてることができる。

つぎにⅡ期について。大溝ＳＤ四〇八九・四〇九〇はこれまでＢ期としてきた。しかし第一九次調査成果によれば、大溝の掘削は七世紀中葉に遡る。中心施設群におけるＡ期は、三期に細分できるが、最も新しいＡ３期が斉明朝に該当するので、大溝の掘削はそれよりも古くなる。大溝の掘削がＡ１期もしくはＡ２期となる可能性が新

たにでてきた。Ⅰ期については、中心施設群の下層で、斜行する建物・塀・溝・暗渠などを検出しており、Ａ期以前の遺構と概ね重なると推定できる。Ⅴ期はＣ期以降と基本的に対応するであろう。

現在の所見をもとに、石神遺跡北方域の遺構変遷をたどったが、出土木簡の示す年代観との微妙なずれがあるなど、問題点も多く残されている。周辺地域の発掘調査を通じて、解決する必要がある。

以上、詳細は『紀要二〇〇三～二〇〇八』を参照されたい。

小山廃寺跡東南部の調査

５ＢＫＩ区　一九八七年八月～九月

小山廃寺は明日香村小山字キテラに位置し、字名から紀寺跡とされているが、確証は得られていない。寺域は左京八条二坊全域の四町を占める。今回の調査は、水田改良工事に伴う事前調査として、寺域の東南隅で実施した。発掘面積は四七〇㎡。検出した主な遺構は、大小一六基の土坑である（図３）。

土坑は東西方向の溝状を呈するものが多く、調査区の西寄りに南北に並ぶ傾向がある。長辺の壁が垂直に近く、短辺の壁が緩やかな船底をなし、底部の中央が一段丸く窪む点に特徴がある。土坑の埋土は基本的に三層に分かれる。下層は砂・木の葉の間層を数層はさんだ青灰色粘土で、比較的長期の堆積層とみられ、木製品と少量の銅滓を含む。中層は短期間の堆積層で、銅滓や木炭などの鋳造関係遺物を多く含む。上層は炭化物や瓦を含む暗褐色粘土の埋立土である。多くの土坑から、炉床・鞴羽口・坩堝・湯口・バリの屑などが出土している。調査区の西北隅に近い土坑ＳＫ一〇では、漆容器が大量に一括投棄されており、またわずかながら金箔も出土した。調査区周辺において、鋳銅工・漆工・箔工などが一体となって作業していたことがわかる。これらの土坑群は寺院造営に関わって掘削され、工房廃止後は塵芥処理用に再利用されたものである。

木簡は、ＳＫ〇一から一〇点（うち削屑七点）、ＳＫ〇六から一点、ＳＫ一一から削屑三点、計一四点（うち削屑一〇点）が出土した。いずれも下層堆積層からの出土である。

詳細は『飛鳥・藤原宮発掘調査概報十八』を参照されたい。

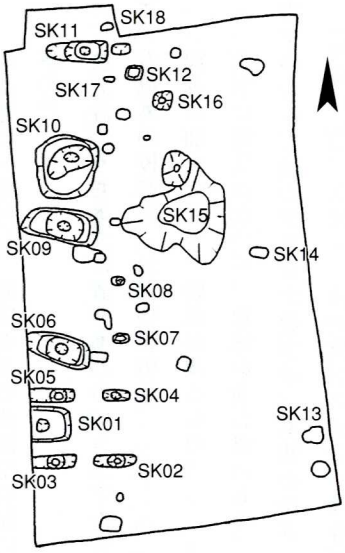


図３　小山廃寺跡調査遺構図　1:400

二、凡　例

(一)木簡は内容により、文書、付札、その他の順に排列するのを原則とし、便宜的に通し番号を付した。

(二)釈文の漢字は概ね現行常用漢字に改めたが、一部本字や異体字を用いた。

(三)釈文に加えた符号は次のとおりである。

・　木簡の表裏に文字がある場合、その区別を示す。

o　木簡の上端もしくは下端に孔が穿たれていることを示す。

…　同一木簡と推定されるが直接接続せず、中間の一字以上が不明なことを示す。

□□□　欠損文字のうち字数の確認できるもの。

[□]　欠損文字のうち字数が推定できるもの。

「　」　欠損文字のうち字数が数えられないもの。

」　「　記載内容から、上または下に一字以上の文字を推定したもの。

「　」　異筆、追筆。

■■■　抹消により判読が困難なもの。

≈　≈　抹消部分の字画が明らかな場合に限り、原字の左傍に付した。

〔×〕　文字の上に重書して原字を訂正している場合、訂正箇所の左傍に・を付し、原字を上の要領で右傍に示した。

「　」　合点。

〔　〕　校訂註のうち本文に置き換わるべき文字を含むもの。

(　)　右以外の校訂註、および説明註。

カ　編者が加えた註で、疑問が残るもの。

マヽ　文字に疑問はないが、意味が通じ難いもの。

(四)釈文下の右行上段のアラビア数字は、木簡の長さ・幅・厚さを示す(単位は㎜)。欠損・二次的整形の場合、現存部分の法量を括弧つきで示した。長さ・幅は木簡の文字の方向による。

(五)釈文下の右行中段に現在の遺存の形態を示す型式番号を記した。なお端とは、木簡を木目方向においた時の上下両端をいう。

011型式　長方形の材(方頭・圭頭などもこれに含める)のもの。

015型式　長方形の材の側面に孔を穿ったもの。

019型式　一端が方頭で、他端は折損・腐蝕などによって原形の失われたもの。原形は011・015・032・041・051型式のいずれかと推定される。

021型式　小型矩形のもの。

022型式　小型矩形の材の一端を圭頭にしたもの。

031型式　長方形の材の両端の左右に切り込みを入れたもの。方頭・圭頭など種々の作り方がある。

032型式　長方形の材の一端の左右に切り込みを入れたもの。

033型式　長方形の材の一端の左右に切り込みを入れ、他端を尖らせたもの。

039型式　長方形の材の一端の左右に切り込みがあるが、他端は折損・腐蝕などによって原形の失われたもの。原形は031・032・033・043型式のいずれかと推定される。

041型式　長方形の材の一端の左右を削り、羽子板の柄状に作ったもの。

043型式　長方形の材の一端の左右を削り、羽子板の柄状にし、左右に切り込みをもつもの。

049型式　長方形の材の一端の左右を削り、羽子板の柄状にするが、他端は折損・腐蝕などによって原形の失われたもの。

051型式　長方形の材の一端を尖らせたもの。

059型式　長方形の材の一端を尖らせているが、他端は折損・腐蝕などによって原形の失われたもの。原形は033・051型式のいずれかと推定される。

061型式　用途の明瞭な木製品に墨書のあるもの。（　）内に製品名を註記した。

065型式　用途未詳の木製品に墨書のあるもの。

081型式　折損・割截・腐蝕その他によって原形の判明しないもの。

091型式　削屑。

（　）内の番号は二次的整形の場合に推定できる原型の型式。

（六）釈文下の右行下段に出土地点を示す小地区名（アルファベット・数字）を記した。Zは地区不明を示す。複数の地区から出土した破片が接続したものは地区名を併記した。

（七）釈文の出土地点下に付した「*」印は、口絵図版に写真を掲げた木簡を示す。例えば「*2」は「図版二」に対応する。

（八）釈文下の左行に、木簡の原形を保持しない部分の形状に関する注記などを施した。その際、木簡の「上端」「下端」「左辺」「右辺」を「上」「下」「左」「右」と略記した。

（九）地名表記を持つ木簡の一部について、『和名類聚抄』にもとづいて地名を推定した。推定地名は説明註として釈文右行に記した。なお、地名推定に際しては、池邊彌『和名類聚抄郡郷里驛名考證』（吉川弘文館、一九八一年）などを参照した。

木簡の釈読は、都城発掘調査部の渡辺晃宏・馬場基・市大樹・山本崇・浅野啓介・竹本晃（当時。万葉古代学研究所）が行なった。編集に際しては、酒井健治・中尾芙貴子・吉水葉子の各氏の協力を得た。写真撮影は井上直夫があたり、現像・焼付は岡田愛が補佐した。図版作成には稲田登志子氏の助力を得た。

本書の編集は市大樹が担当した。

三、釈　文

第一四五次調査（５ＡＭＤ区）

斜行溝ＳＤ四二六〇

1　□□女丁大人丁□取□久□　〔意カ〕〔御カ〕　(355)・21・6　081　PE73　*1
上下折レ。

2　大家臣…□首大□　(57＋31)・18・3　032　PE73　*3
上下二片カラナリ、中間部欠損。
下二次的整形。

3・十五斤
・「□□□□」　〔思カ〕　112・24・4　032　PF73

4・□　〔外カ〕
□□天（刻書）
・天天二
天大五九（右側面、刻書）　46・57・35　065　PG73　*3

道路ＳＦ二六〇七造成土

5　弥阿□□□□□　〔以　腰カ〕　108・34・5　032　PK79
左上欠。

6・□天于
・天王　229・86・12　065　PL81　*3

南北溝ＳＤ四〇九〇

7　六人ア尼麻呂贄四古　138・21・5　031　PJ76　*2

8　□
□百代五十代□
□歩□大百代□
□□□□　□
□　（刻書）
□「大家臣加□
□　以蛭ア今女□
□　乙里田知不
□　石上大連公　」　(286)・(48)・5　081　PF75　*1
三片分離。四周欠損。

9・□□□□□〔二カ〕□□□□□□□□加尼ア加□女
・□□　□　(316)・25・4　081　PF75
上下二片分離。上下折レ。

10　□廿七人　沙弥六十　(115)・(48)・4　081　PF81　*2
三片分離。上・左下二次的整形。
下折レ、左割レ。

11　椋〔椋カ〕□椋□　(63)・(20)・2　081　PG75
下折レ。

東西溝ＳＤ四二七五

12　尾□　(77)・31・6　033　PJ76
下二次的整形。

暗灰褐色粘質土

13・□□〔山カ〕評佐加五十戸
・十市ア田ツ六斗俵　120・19・5　032　PK74　*2
左上・右上・左下欠

東西溝ＳＤ四二八〇

14・辛巳年□〔鰒カ〕一連
・□〔物カ〕ア五十戸　125・32・3　032　PK81　*2

15・□
・□〔俵カ〕　(51)・(11)・3　081　PK77
上以外欠損。

16　□□米二斗o　(149)・43・3　019　PK82　*2
二片分離。上折レ。

東西溝ＳＤ四二八五と南北溝ＳＤ一三四七Ｂの合流点

17　田田塩二斗　118・23・7　031　PI74　*3

南北溝ＳＤ四二八九

18 ・上長押釘卅隻之中打合釘二　五丈
　　長七寸
　・「□□□」（削リ残リ）　248・36・3　032　PI82　*1

19 □村廣人弟国□　(124)・20・3　081　PG82　*2
　　上下二次的切断。

20 ・　　正月四日志紀未成
　・□　(148)・11・2　081　PK82　*2
　　上折レ、右下欠。

21 □一□□
　□三□〔枚カ〕o
　□四枚　(177)・22・2　061（檜扇）　PK81　*3
　　上折レ。

現代暗渠

22 o小柱十九　150・37・4　081　PK75
　　左上・右上欠。

第一二二次調査（５ＡＭＤ区）

土坑ＳＫ四〇六四

23 〔殿カ〕□　091　RR79

24 □廣　091　RR79

土坑ＳＫ四〇六六

25 日　三川　091　QC81　*4

26 〔奉カ〕□□　091　QC81

27 □田ア　091　QD81

28 ア　091　QD81

29 〔日カ〕□　091　QC81

30 〔日カ〕□ 091 QC81

31 〔三カ〕□ 091 QC81

土坑ＳＫ四〇六九

32 〔年カ〕□六 091 QC80

33 〔年カ〕□□十二 091 QC80

34 〔二カ〕□日 091 QC80

35 尾□〔治カ〕 091 QC80 *4

36 大濱五（参河国幡豆郡大浜郷カ） 091 QC80 *4

37 垣守 091 QC80 *4

38 〔垣カ〕□守 091 QD79

39 卿 091 QC80

40 〔一人カ〕□□ 091 QC80

41 六□〔人カ〕 091 QC80

42 二□ 091 QD79

43 大ア□ 091 QD79

44 □ア…□古 091 QD79

45 □首□〔大カ〕 091 QC80

46 麻□ 091 QC80

47 人□〔主カ〕 091 QC79

48 □ツ 091 QC79

49 皮□ 091 QD80

50 □□ 091 QC80
〔見カ〕□

51 〔買カ〕□ 091 QC80

52 相〔功カ〕□ 091 QD79 *4

53 □□上 091 QC79

54 瀆 091 QC79 *4

55 長 091 QD79

56 〔裳カ〕□ 091 QC80

57 〔宜カ〕□ 091 QC80

東西溝ＳＤ四〇八九

58 月十日僕手乞□ 091 RP75 *4

59 □月 091 RP75

60 月 091 RP75

61 〔七日カ〕□□ 091 RQ77

62 □仕奉 091 RP75 *4

63 □□□賜 091 RP75

64 五十戸〔若カ〕□ 091 RQ78 *4
□□□ □

65 ・三〔里カ〕□ 091 RQ80
・一（墨線）

66 〔荒カ〕□田ア□ 091 RP75 *4

67 田ア 091 RQ79

68 □ア 是 091 RP75

69 □ア 091 RP75

70 □男 091 RQ76

71 閏 091 RQ80

72 賞□〔有カ〕 091 RP75

73 □□□〔椋墻カ〕 091 RQ79

74 天天天天□〔天カ〕 091 RQ80

75 □□□〔五五五カ〕 091 RQ76

76 大□〔大カ〕 091 RQ80

77 □ 道□ 091 RP75

78 □ □遠 091 RP75

79 遠□ 091 RQ75

80 □丙 091 RP75

81 千□ 091 RP75

82 □衣 091 RP75

83 □徳 091 RP75

84 守 091 RQ79

85 職 091 RQ75 *4

86 下 091 RP75

87 自 091 RQ75

南北溝ＳＤ四〇九〇

88 三野□ 091 QC76

89 人為為 091 QB75

90 賜 091 RR75

91 □□者□ 091 RR75 91～94号は同一簡ヵ

92 □□〔者ヵ〕 091 RR75

93 □者□ 091 RR75

94 □〔者ヵ〕□ 091 RR75

土坑ＳＫ四〇九七

95 亥年 091 QB75 *4

96 是遠命□ 091 QB75 *4

97 〔国ヵ〕□ 091 QC75

98 〔丁ヵ〕□□ 091 QB75

99 □売 091 QB75

100 売 091 QB75

101 蝮 091 QC75 *4

102 月 091 QB75

103 月 091 QB75

104 三 091 QB75

105 〔六ヵ〕□ 091 QB75

106 十□ 091 QB75

南北溝ＳＤ一三四七Ａ

107 □巳年五月□□ 091 RR73 *4

108 □□□仕奉□□ 091 RQ73

109 □□□〔伊カ〕□西国 091 RR73 *4

110 五十戸 091 RR73

111 □人〔雀カ〕□ 091 RR73

112 □屋椋□ 091 RQ73

113 □賜 091 RR73

114 □辺辺辺辺辺 091 RQ73

115 □辺辺辺□ 091 RQ73

116 □野□ 091 RR73

117 野□ 091 RR73

118 大 091 RR73

119 □〔罷カ〕□ 091 RR73

小山廃寺跡東南部の調査（５ＢＫＩ区）

土坑ＳＫ〇一

120 ・□可三万呂 (108)・28・2 081 GI14
・□〔日カ〕□ 上二次的切断、下折レ。

121 □□〔下カ〕□ 118・25・3 033 GI14
右中程欠損。

土坑ＳＫ〇六

122 □□国□ (96)・28・2 039 GK14
下折レ、左上・右下欠損。

土坑ＳＫ一一

123 下毛野人□ 091 GP13

124 □定□ 091 GP13

☆既報告釈文の変更

※数字は木簡番号、数字は所載の頁を意味する。

藤原宮木簡一

8・卿等前恐々謹解寵命□
・卿尓受給請欲止申 (206)・21・1 019

9・御門方大夫前白上毛野殿被
・烏草六十斤□□頓首白之 219・24・3 011

57 〔贄カ〕□十貝 (101)・(29)・2 081

133 □ア臣刀良 (93)・(8)・3 081

142 □□里□大贄□□ 252・(12)・2 081

169 〔神カ〕□郡前里鮎十八斤 (105)・15・3 031

185・高椅連刀自梨
・〔調カ〕□三斗 (84)・14・3 039

190 阿由二斗〔一カ〕□升 (125)・25・6 039

197 荒阿津支□□ (112)・13・2 033

199 〔具カ〕□□里人大伴ア田〔人カ〕□□□ (131)・(10)・2 081

200・□俣里〔蝮カ〕□干
・□□ 139・23・2 031

202 魚切里人大伴□□□□〔女戸カ〕□ (173)・(24)・4 081

203 □佐一斗五升 (62)・20・3 039

205 徇子蝮 89・14・1 059
213 □里上ア □軍布 (73)・31・4 039
214 □□ 若□□郡□□□ □ □一斗五升 (112)・24・2 039
417 〔寸主カ〕□□白髪戸□ (134)・22・4 081
421 ・三川国鴨 ・□□□□上□□ (104)・(12)・4 081
487 ・□宮末呂又粟 ・□ (76)・15・3 081
488 ・〔尻カ〕□ア奈波手 ・俵 154・25・4 033

藤原宮木簡二

551 〔野カ〕□□里秦人□俵 165・18・3 051

814 綾海高□ア汙乃古三斗 262・19・3 031

飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報（五）

4 ・〔皇太妃カ〕□□宮職解 ・〔山ア門カ〕□□ □〔三年カ〕□□□□ (154)・(13)・5 081
4 ・造兵司解 〔麻部カ〕□□□ 〔寸五分之二カ〕六□□□□□□□ (209)・(21)・5 081
7 右大殿荷八 (241)・25・5 039
11 ・浅井評□□里人 ・粟田布西臣〔船カ〕□身 175・22・3 033
11 ・錦ア里身人ア支波〔美カ〕□ ・一枚 135・17・4 031
11 □□里葛木直〔万呂カ〕□□薦 122・19・3 032

飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報（六）

15 備後国□　□斗一升　146・27・4　031

15 大里舎作□〔造カ〕得□　(94)・(13)・4　039

15 □□□□□〔田カ〕ア□麻呂御調八連　263・24・4　033

16 大嶋穂積□□心太廿斤　(130)・16・3　059

17 ・□□□〔牟邪之カ〕　三斗一升
舎人連　日置
月麻呂
・　220・28・5　032

飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報（九）

8 □□里雀ア枚男　121・27・3　031

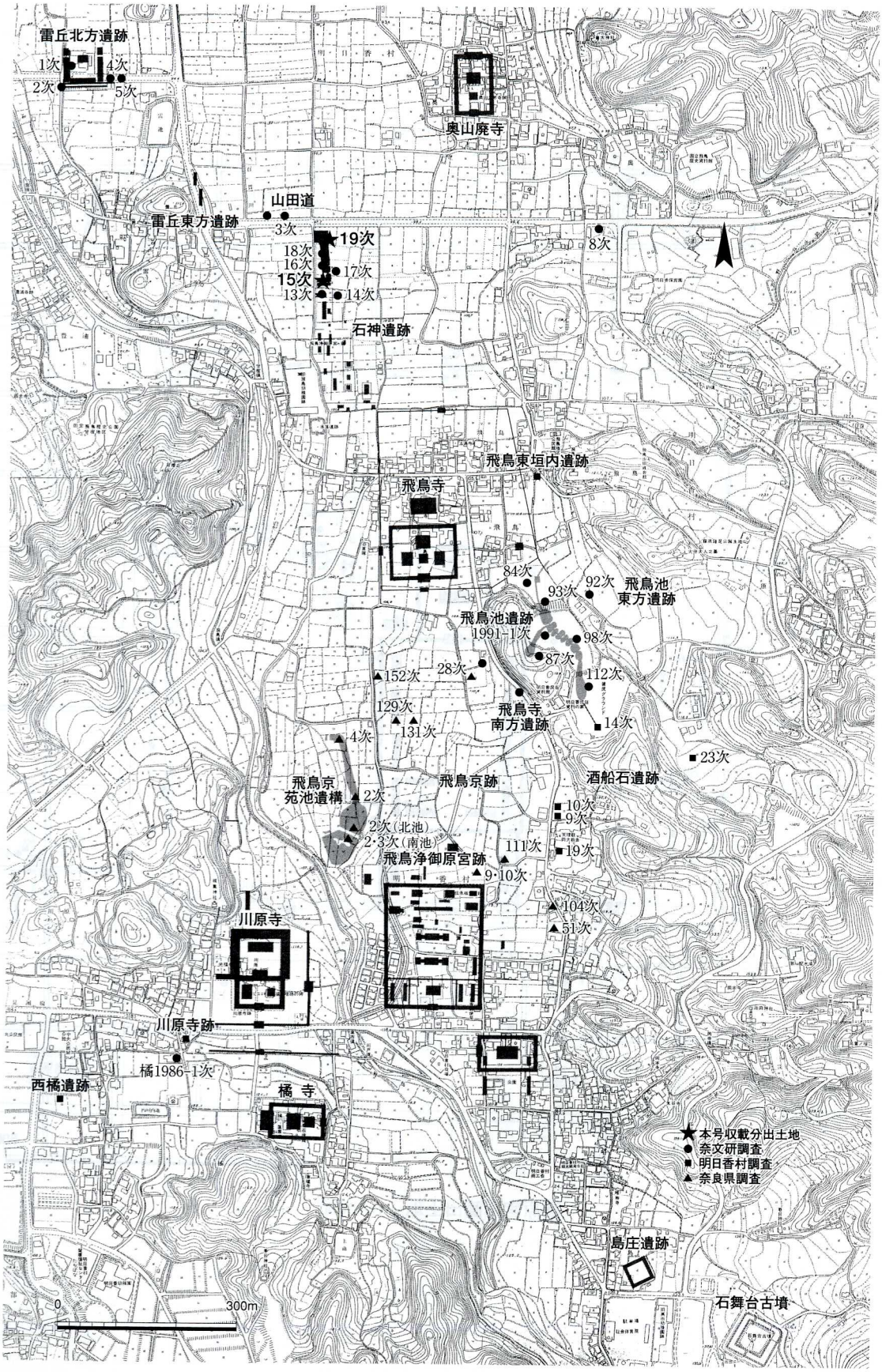
飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報（十七）

43 ・鮎川五十戸丸子ア多加
□鳥連淡佐充干食同五□□三枝ア□
〔大カ〕〔十戸カ〕
・□□ア□　□□□□□〔五十戸真須カ〕
□ア白干食大野五十戸委文ア代□　(185)・(28)・5　081

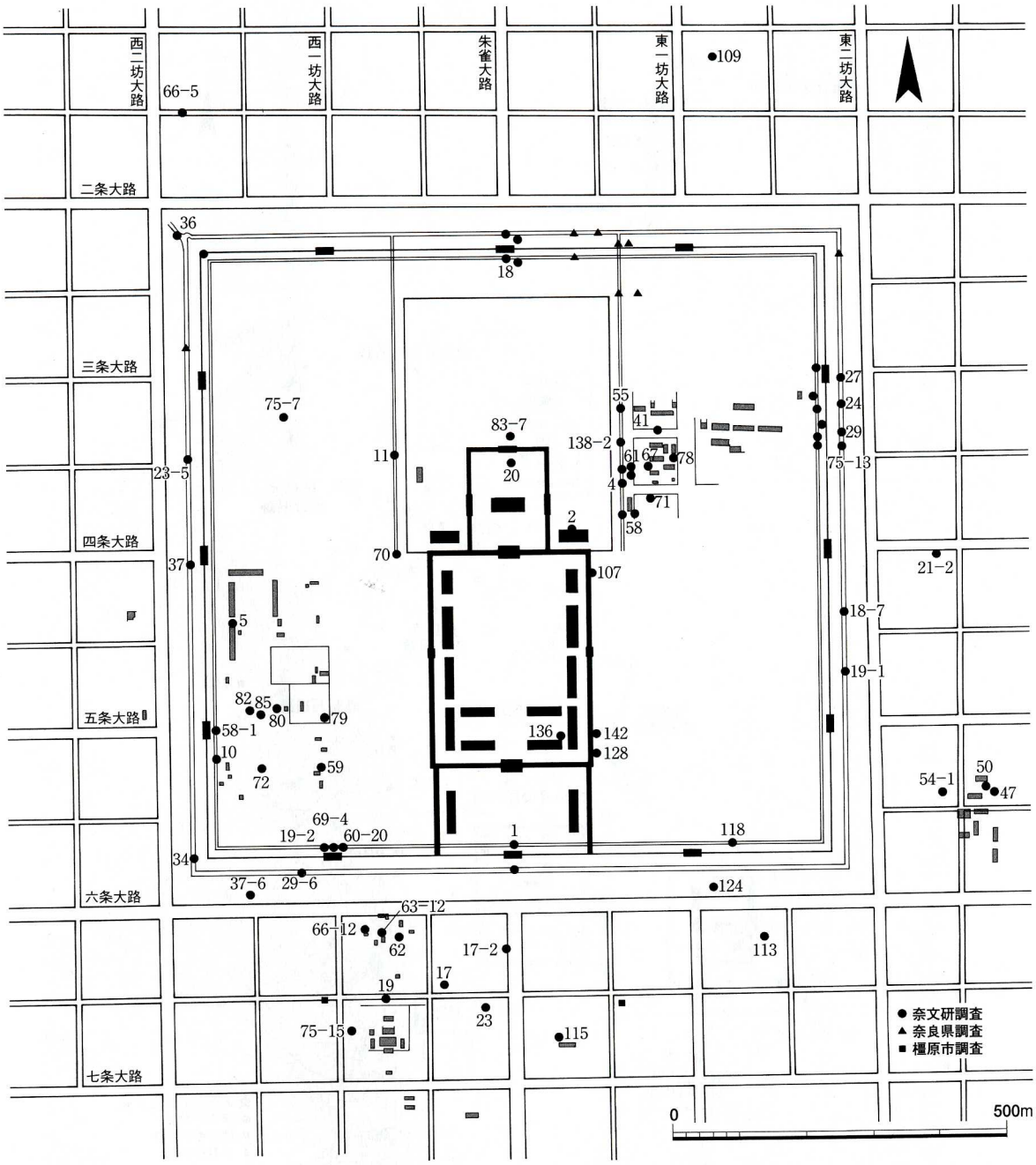
飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報（十八）

1 ・恐々還申我主我尊御心□賜□□〔随カ〕
・可慈給其食物者皆此仰旨待侍耳　320・36・2　011

149 留之良奈弥麻久（刻書）
阿佐奈伎尓伎也　91・55・6　065



飛鳥地域木簡出土地　1:10000



藤原宮木簡出土地　1:10000

二〇〇八年十一月十四日　印刷
二〇〇八年十一月二十一日　発行

飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報（三）

編集・発行　独立行政法人国立文化財機構
奈良文化財研究所

〒六三〇―八五七七
奈良市二条町二丁目九―一
TEL　〇七四二（二四）三九三一
FAX　〇七四二（二二〇）六八三〇